いったという問題が、類似の問題としてあるわけです。現代中国も一つの帝国だということが言えますし、無徴の漢族というのは合衆国の研究で言いますと白人と言えると思いますけれども、これが十把一絡げになってマジョリティーだということになっていて、中国人や他のアジア人も入っていっているのですが１つに分類されてしまっているという、新しく Race にされていくというのがありますね。Asian という Race というのが統計資料のなかに、分類項目として出てくるということもあります。

ですから西洋史のアプローチ、他のアジア史のアプローチというのを、われわれというより私は学んでいかなくてはいけないなと、そういう反省をいたしました。

**●高**―　ありがとうございました。馬場先生、時間はいかがですか。よろしければ最後のお一人でも、よろしいでしょうか。

**●伊藤**―　ひとことだけよろしいですか。

**●高**―　伊藤先生どうぞ。

**●伊藤**―　部外者の立場からですが、大陸中国という膨大な多様な社会を、またこれだけの多くの研究者が集まって、こういうかたちをとって討論するのを見て、韓国研究とはかなり様相が違うという印象を受けました。ですから、多様であり一体性を述べて、まさに中国の現実をみなさんが分担しながら討論しています。

愛知大学にもお願いすることになりますが、こういう中国研究の体制として、ＣＯＥでなくてもこういう機会を定期的に持つことは、中国研究に必須なのではないかというように思いました。私は部外者として参加させていただきました。ほんとうにありがとうございました。

**●高**―　ありがとうございました。

◆◆◆◆◆

**●高**―　それでは最後に、加々美先生から総括および閉会の挨拶をお願いします。

**●加々美**―　みなさんお疲れでしょうし、あまり長く話はしないつもりです。長くしゃべったら注意してください。

クロスオーバーという以上、互いに接触するわけですが、受け身の接触もあれば能動的な接触もあるわけです。ですからエスニシティをめぐるアイデンティティにかかわる接触の問題も、このなかではテーマの一つですし、研究者同士のクロスオーバーもまた重要なポイントだということを、瀬川さんにお話いただいてたいへんよかったと思いますが、その場合にも同じように、受動的なものであるか能動的なものであるかというのは、非常に重要な意味合いを持ちます。

一般にアイデンティティというのは、もちろん抵抗のナショナリズムといったようなことから受動的なものとしても生まれますけれども、同時に簡単に言うと主体の側から、自ら能動的に何かを提起することによってアイデンティティが形成されていきます。三尾さんの台湾などの例がそれをよく示していますし、最後の小嶋さんのジェディッディズムも、またそういう性格のものだったと私は思っているわけです。

その点で言いますと、瀬川さん、渡邊さんが大変重要なことをおっしゃいました。多元性という

問題が一つは幻想の多元性と、もう一つは生活次元の多元性があると言われたわけですが、生活次元の多元性というのは、だいたい国家とか政治というものが向こうからやってきて、これを迎え撃つ形をとります。例えば市場経済化の問題をお考えになっていただければわかりますが、市場経済化の問題はむろん中国国家の意思として出されていくものですが、マイノリティーから見れば向こうからやって来るものでもあり、同時にそれは生活次元の多元性に大きな影響を及ぼすものです。

それに対して、ではマイノリティーの側はどう応じるか。例えば松岡さんの場合でもほかの方々の場合でも、出稼ぎの問題がよく出てきます。実は出稼ぎ自体が、例えば生業に基づく暦を変化させていくわけです。もともと山の神の祭りというものは、その地域の生業に基づいているものですけれども、出稼ぎ者はむろんその範囲から、その生活圏から離れてしまいます。離れたときに出稼ぎ者は何に拘束されるかと言えば、新暦的な暦です。本来の自分の生業とは違うものによって拘束され、しかも場合によっては農業的な生業すらも市場経済化、いわば国家の能動的意志によって影響を受けます。そして受けた影響が出身の村にフィードバックしていきます。

出稼ぎ者は、春節のときに出稼ぎ先に居ても何もやることがないから、そのときは出身の村に戻ってくるわけです。戻ってくれば、それは生業の世界にもともとある暦に、外来者として大きな影響を及ぼすというかたちが生じてきます。そこには能動、受動、能動、受動という関係が常にダイナミックに働いていて、それがまた華化の関係として出てくるということです。

ですから、これは当初から言われたことですけれども、漢化は空間抽象的なものではなくて時間と空間、つまり歴史性と空間の併用に基づいてその内容を変えてきました。そしてまたこれからも変えていきます。だから漢化の定義を普遍的、抽象的におこなうことはできないし、華化の定義も同じです。ただ、そのダイナミズムについては、定義がかなりの程度可能であると私は思います。

もう一つ、クロスオーバーをめぐっての研究方法について。このＣＯＥプロジェクトは、中国学の方向的な共通枠組みをつくることに基本線があります。最後の印象的な発言で三尾さんがお話になったことや、あるいはその前に「プラットフォームが必要だ」という発言が瀬川さんからありましたけれども、プラットフォームにせよ立場性にせよ、プラットフォームはその背後にオリエンタリズムとかかわりがあるわけです。

立場性というものについて、自分からフリーになれるとおっしゃったのですが、少なくとも中国政治思想研究をやってきた私の立場から言えば、毛里先生にせよ、国分先生にせよ、私にせよ、完全な客観性などというものは貫けません。必ず自己の立場というものがあるのです。研究者としての自分の立場と研究対象が有する立場は同じものではあり得ないということです。この点を自覚し、方法的にどう取り入れるかが立場性からのフリーの視点の獲得に関係すると言っていいわけだけれども、それは決して自己に立場性がないということではありません。

そのときに自分の足下にある立場というもの、例えばプラットフォームをつくるつくらないにかかわらず、あるいはできないできるにかかわらず、足下にある立場を自分が方法的に自覚し、相対化できる視野を持たなければ、従来の中国学の一つの弊というものを抜け出ることができないと私は思います。

その意味で、他者研究であることを瀬川さんが意識するということは、実はその自覚が大事なのです。先ほど田島先生が小嶋くんに、「では民族区域自治に代わる何か違うオプションを出せ」と言われたけれども、それははたして自分というものと他分というもの、その共感のなかで行ったり来たりしている研究者がやるべきことでしょうか。やるべきとすれば、そこにどのような方法的問題があるのか、この点も方法的には、明確にしておくべきことなのです。

一人ひとりの研究について触れることができませんでしたが、実は８月末までにこのＣＯＥの報告書を書かなくてはいけなくて、私は方法論のまとめをしなくてはいけないのです。

このシンポジウムからは、ものすごくたくさんいろいろなものをいただきました。もちろん、私は文化人類学者でもなければ社会学者でもないし、民族学者でもありません。いろいろな意味で中途半端な人間で、ちょっとおしゃべりが過ぎましたけれども、あちらこちらでそうやって意見を言わせていただきました。ですがそのおかげかどうか、みなさんに迷惑を掛けながら、たいへん多くの収穫をいただきました。それは必ず８月末の最終報告書に生かすつもりでございます。

さらには華化、漢化について、可能な限りポストＣＯＥを奪い取って、そうではなくてもどこかからお金を取って、来年の４月以降それをテーマとしたシンポを必ず実現いたしますので、先ほどの伊藤亜人先生の私たちへの要請を、真正面から受けさせていただいて頑張ります。

みなさん、ほんとうにどうもありがとうございました。

**●高―**　加々美先生、ありがとうございました。

確かに国際中国学研究センターがなければ、このような深く意見交換できるシンポジウムを開催することができませんでした。ありがとうございました。

これをもちまして、「漢族・少数民族研究の接合」国際シンポジウムを終わらせていただきます。お疲れ様でした。

最後になりましたが、このシンポジウムの趣旨をまとめる際に、私の日本語の文章を添削していただいた曾士才先生、大変有意義なアドバイスを下さった三尾先生、総合セッションのコメンテーターを快諾していただき、開催主旨について事前に意見を交換していただいた渡邊先生と瀬川先生に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。